

「私は妻に2回触っただけだ」 —ある男性の自己理解の困難な道のり—

Per Isdal & Per Nørbech

そのロールプレイは女性を虐待したある男性の治療センター ATV (Alternative to Violence) での初めての面接の様子を示している。その男性が最初の面接をしたとき、彼はすでにそのセンターに電話で連絡を入れ、妻に暴力をふるってしまうことについて精神療法を受けたいと望んでいた。彼は、自分が1週間前に電話したときよりもよりよくなっているという実感を今持てるかどうか、この面接でそれが確認できるか不安であるという発言から話をはじめた。

彼は、人間関係の中で感じていた困難さについて話し続けた。彼は、妻に出会ってすぐに妻が妊娠したので、教育を中断し、家族を養うために仕事に就かねばならなくなった。それに加えて彼は、お金が不足しているために長時間労働を余儀なくされた。彼が働いていなかったとき、彼が男性の友人とすごすのではなく、家にいるべきであるというパートナーの要求を、彼は感じていた。彼は義務感からそれに従った。彼は仕事で疲れきっており、週末は家で過ごしたかった。妻がパーティーや友人と一緒に過ごすことを望んだときに、彼は妻に無視されたと感じた。

セラピストは彼の話のをさえぎり、妻に対する暴力の問題は最近の出来事なのかどうかをたずねた。その男性は、いつも嫉妬深いという問題を除けば、自分は暴力的ではないと説明した。セラピストはそのことをとらえて、その嫉妬がもたらした結果は何なのかとたずねた。しばらくしてその男性は、嫉妬のために2回「妻に触った」ということを認めた。

セラピストは、それが何を意味するのか知りたかったが、彼は答えるのに困っていた。セラピストは、彼がセンターに電話をした前の晩に、何が起こったのかを知りたかった。彼は「妻に触った」のか？

その男性は躊躇しながら、パートナーが自分を無視していると感じたときに、パーティーで起こった出来事について話しはじめた。彼は、暴力をふるうことのできる場所に彼女を誘い出した。

この話をすることは、彼にとって非常に困難であった。彼は絶えず、暴力以外のことを話すことによって、苦痛と無気力を抑えようとした。

そうした抑制が効かないときは、彼はくり返し、暴力をとるに足らないことにしようとした。「それはそんなにひどくなかった」と彼は言った。彼はまた、自分の苦痛をコントロールするために、自分には彼女を殴るしか選択の余地がなかったと主張し、脚色した話をしようとした。要するに、彼はすべての場合において、暴力をふるったことに対する彼自身の責任から逃れようとしているのだ。

そのロールプレイは、一方では、その男性が暴力をふるったと自覚することを常に避けようとするメカニズムは何なのかを明らかにする。それは、暴力が自分自身の無力感をコントロールしようとする最初に行われる試みであること、暴力をふるったと認めなければならないことは非常に苦痛であること、そして、暴力の背後には怒りの感情があることを示している。

もう一方で、ロールプレイは、セラピストが、その男性の苦痛を尊重すると同時に、その男性の破壊的な性格について耳をかす状態にあるということを示すことがいかに重要かを表そうとしている。セラピストの基本的な態度は、暴力の重大さに注意を向けると同時に、その男性を思いやりのある人間に導くことである。

(田代美江子)